

# 阿部大夢

第8回BFA  
U・15アジア選手権準優勝  
仙台育英学園秀光中3年  
中田町茶畑出身

Hiromu Abe



第8回BFA U・15アジア選手権は10月8から12の5日間、静岡県伊豆市志太スタジアムで開かれ、侍ジャパンU・15代表は3大会連続となる準優勝の栄誉に輝いた。阿部は「準優勝という結果は誇れるものだが、満足はしていない」ときっぱり。このカテゴリーで、史上最強と言われたチームの目標は優勝。達成できなかったことに悔しさをにじませる。

激闘から5日後、チーム練習終了時に部員全員が集められた。須江航秀光中監督から、侍ジャパンへのメンバー入りが告げられた。野球人なら、誰もがあこがれる白の縦じまユニホーム。断る理由はどこにもなかった。「本当にうれしかった。こんなチャンスを断る野球人はいないはず。偶然かもしれないが、渡された背番号はチームでも付けている10番。自分の中でいろんな意味を感じた」と話す。

それから2日後、千葉県船橋市で代表合宿が開かれ、副将を任せられた。チームでは主将を務め、人をまとめることには長けている。「集まったメンバーは、全員が各チームの中心選手。個性は強いが、『優勝』に向けてすぐにまとまった」と振り返る。

万全の準備で向かえた初戦。相手は優勝候補の一角、韓国。2番、捕手で出場した。「韓国、台湾は、気を抜いたらすぐにやられると監督に言われていた。しかし、自信を持って臨めと送り出され、スイッチが入った」と初の国際試合にも臆することなく臨む。初めて歌う試合前の国歌の感動も、マスクを被った瞬間に忘れ、試合に集中した。

試合は投打がかみ合い、13・0の5回コールド勝ち。自身も4打数1安打、進塁打2と2番の仕事をごなし、守っては抜群のリードで無失点勝利に貢献した。「初戦をよい形で勝利し波に乗った」と話す。と話し、中国を全てコールド勝ちで撃破。優勝を決めた台湾戦は一進一退の攻防となったが、あと1本が出ず0・2と惜敗した。

「メダルを獲れてうれしい。でも、優勝できなかった悔しさもある」と語る及川。第46回ジュニアオリンピック陸上競技大会は10月23から25までの3日間、神奈川県横浜市の日産スタジアムで開催された。陸上競技A女子1000メートルハードルに出場した及川は、14秒22のタイムを出し、2位入賞を果たした。

及川は今年、国内の主要大会である全日本中学校陸上競技選手権大会と国民体育大会に出場。全中では4位入賞と、あと一歩でメダルを逃し、今大会では3位以内の入賞を目標に掲げていた。

1000メートルハードルは、一般にハードルとハードルの間を3歩で走る。全中と違いジュニアオリンピックや国体では、ハードルのインターバルが50センチ長くなる。昨年11月に短距離からハードルへ転向した及川にとって、歩幅を調整することは未知への挑戦であった。

「何を練習したらいいのか」と迷いつつも、徐々にハードル間の距離を延ばし、反復練習をすることで、頭での理解と体の動きが連動。スムーズなハードリングができるようになった。

全中から約1週間後に開かれた県選考会では、1位で出場権を獲得した。9月26日から開催された国体では、自己ベストの14秒04を記録。今大会での3位以内入賞は、手に届くところまでできていた。

迎えた本番。「彼女は気持ちのコントロールがうまい」と話す顧問の鈴木。程よい緊張を保ったまま、予選、準決勝を1位で通過した。決勝では、1回目のスタートで隣の選手がフライング。次にフライングをした選手は失格というブレッシャーの中、この日一番のスタートを見せる。しかし、他の選手も負けておらず、先行を許す。2台、3台と跳んでも追い付けない。焦ったが、後半追い込み形なので、自分を信じて走った」と、見事な追い上げを見せた2位入賞。中学校生活集大成の大会で輝かしい成績を残した。ここまでこれたのは、「先生や友だち、家族の支えがあったから」と感謝の気持ちを語る。

高校のハードルは、中学と比べ約8センチ高い。今はずでにその課題と向き合っている。高校での目標は「13秒台でインターハイ入賞」と語る及川。見事なハードリング同様、目標を跳び越えていくだろう。

# 及川優花

Yuka Oikawa



第46回ジュニアオリンピック陸上競技大会  
陸上競技 1000メートルハードル2位  
中田中3年 中田町本町畑中